



よろい
甲を着た古墳人だより



囲い状遺構の南西コーナーに小型鏡が出土

金井下新田遺跡では、古墳時代の政治・祭祀の拠点と考えられる囲い状遺構が発見されています。その囲い状遺構の南西コーナー内側で、小型の青銅鏡1面が出土しました。鏡は、6世紀初頭の榛名山から噴出した火山灰下から、薄く黒色土で覆われた状態で出土しました。

出土した鏡は、日本国内で製作された鏡（倭製鏡）で、文様の特徴から「ねじもん振文鏡」の可能性が高いことが判明しました。鏡は、囲い状遺構の網代垣を設置した後に丁寧に埋納されており、囲い状遺構と強い関連があるものと考えられます。囲い状遺構の性格を考える上で、また、古墳時代の鏡の役割を考える上で貴重な発見となりました。

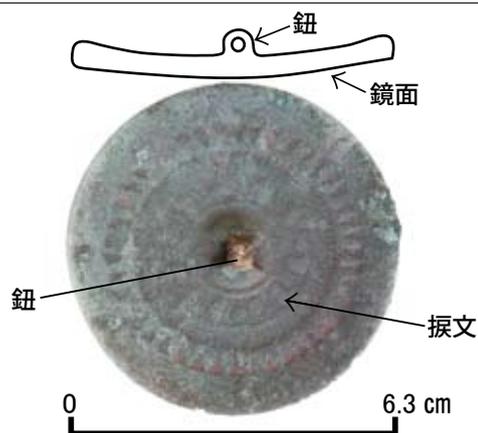


鏡の埋納（手前部分の黒色土を取り除いた状態）

■金井下新田遺跡の振文鏡ねじりもん

出土した鏡は、面径約6.3cmの青銅製の鏡です。振り紐（ねじりひも）状の文様がある小型倭製鏡です。この文様は、鏡の文様として古くから使われてきた獣形の文様の一部が祖型となっていると考えられています。

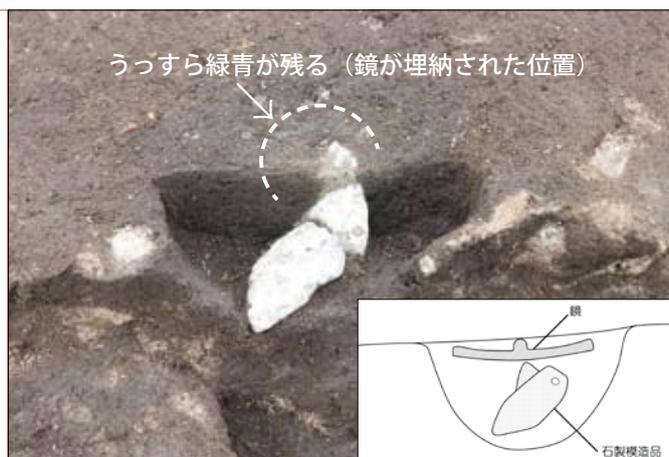
鏡の一部には赤色顔料が付着しており、ちゅう鈕（つまみ状の部分）には樹皮のようなものが残っています。



■振文鏡の出土状態

鏡は、囲い状遺跡の南西コーナー内側で、剣形石製模造品2点とともに直径約10cm、深さ約12cmの小さな穴から出土しました。出土した状態から、まず剣形石製模造品2点を穴に埋め、その上に、鏡面を下にして水平に置き、土をかぶせて埋納したものと考えられます。

写真は鏡をとりあげた後の状態で、うっすらと緑青が残っています。



■鏡の役割

古墳時代の鏡は特別な力をもつ権威の象徴であるとともに、祭祀の重要な道具の一つと考えられています。

金井下新田遺跡の鏡が囲い状遺構の南西コーナーに丁寧に埋納されていることから考えると、囲い状遺構を守護する、あるいは囲い状遺構でおこなわれた祭祀に使われたなどの鏡の役割が考えられます。



■祭祀と鏡

渋川市には金井東裏遺跡3号祭祀遺構すもんで素文鏡、宮田諏訪原遺跡1号祭祀遺構じゅうもんで乳文鏡という小型倭製鏡が出土しています。明らかな祭祀遺構から出土した小型倭製鏡は、全国でも数例で、祭祀と小型鏡の関係は謎に包まれています。金井下新田遺跡の鏡から何がわかってくるのか、今後の研究にご期待ください。

